㉕　石井ちくさん

【聖訓】　　８６頁

東京の別院で布教の時、あるお婆さんが、今日は面白いことがありました、私がある会社に行きましたら若い社員達が、お婆さんは何時も南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と言っているが、それを称えたらどれほど儲けがあるのかい。あなたたちのような迷児にはわかりませんよ、おれたちは迷児ではないぞ、そうだ迷児ではなくて迷い親であった、馬鹿迷い親というのがあるか、自分たちは家と会社とを往復しているが一度も迷ったことはないよ、ふん道を迷わないのを迷い親でないというのですかい、それならどこから生まれて、死んだらどこへ行きますかい、お母さんのお腹から生まれて、死んだら火を消したように消えるよう、そのくらいのことなら子供でも知っていますよ、お母さんのお腹の前は、そんなものは見たものはいないから知らないよう、死んだ先は、誰も確かめることができないから知らないよう。産まれてくる前もわからなければ死んでいく先もわからないとすれば迷い親ではありませんか。本当そうやなあ、それなら婆さんはわかっているのかい、それがわからなくていえますかい、それなら言って見、言ってみよというくらいで言えますかい、どう言ったらよいのだ、教えてくださいと言いなさい、教えて下さい。言いますよ、前が有ったから今がある、今があるから後が出てくる。そのくらいのことなら誰でも知ってるよ、知っているのなら尋ねなくてもよいのにと言いましたよ、面白かったね。お婆さんは難しいことは言えないが、過去の原因から現在の結果を得、現在の原因から未来の結果を得ると言ったのですが、蒔いた通りの結果が出ると言っているのです。

８９頁

東京の別院であなたたちは迷い親ようと言ったお婆さんが、大正十二年の大震災の時、自分は仏さまと通帳を腹に巻き、娘にお米と味噌を持たして松原の広場に出た。各方面から燃え上がる火の手、戦々恐々不安の中に漸く平静を取戻し、仏さまを松の枝にかけて正信偈を誦げ始めた。五十人百人千人と唱和して青空の下の正信偈は初めてだ。息子も来た、ああ本願寺の

仏さまはご真影さまはご安泰か、お見舞いに行かねば、お母さん火の海よ、大千世界が火の海であろうと、ついに築地に着いたのは夜明け、焼け落ちた本堂、これが末世の相か、とお念仏している時役僧さんの姿を見て、ご仏像もご真影も浜の離宮の方にお移り遊ばしたと聞いてべったり座り、生命にかけても復興さしていただきます、仮本堂が建立、岡部輪番が次から次に寄付を頼まれる、古着を荷うて売り歩くお婆さんがそのたびに儲かっているお銭を全部寄付する、えい、これが最後だ最後だと差し上げる、長男は大学、長女は女学校成績は優秀、月謝や出資の必要の時はどこからお金が廻ってくるのか一度だって困った時がない。仏さまがちゃんと用意してくださるありがたさ、本堂が百万円で建立されたが、お婆さんの細腕で拾万円集めたそうなが、本当に信仰の力であったそうです。二人の子供は健康で、兄は外交官になり妹はお寺に嫁入って、お婆さんは可愛い孫と楽しい余生を送ったそうです。

南無阿弥陀仏をとなうれば　この世の利益きわもなし
流転輪廻のつみきえて　定業中夭のぞこりぬ
山家の伝教大師は　国土人民をあわれみて
七難消滅の誦文には　南無阿弥陀仏を称うべし

と仰せられておりますが、今のお婆さんの心持は、生まれ難い人間に生を受け、稀に逢う絶対他力の名号と一体になり、お手伝いさしていただく身は、いくら貧乏をしていても心は大福長者であり、感謝に満ちた生活ですから、健康に恵まれまだ報謝ができないできないと必死になって努力するから、親の善根の種が子供に花が咲き孫に実を結んで、毎日が感謝、毎日が法悦でありますから、万億の富を抱えて金や土地の番をして喧嘩ばかりしている家とは雲泥の差があります。

東京の築地別院で布教中、石井ちくという婦人が、「先生、今日は面白いことがありましたよ。ある会社に行ったら「お婆さん、お前は南無阿弥陀仏なむあみだぶつと言っているが、どれだけ儲けがあるかい」「貴方たちのような迷い児にはわかりませんよ」「俺たちは迷い児ではないぞ」「そうじゃ、家内もあれば子供もある、迷い親であったなあ」「自分は家と会社と道を一度も迷ったことはないぞ」「転宅のとき、自分の家内を忘れて行った人があるそうですよ。そんな人は滅多にいないが、自分を忘れている人ばかりだそうですよ。お尋ねしますが、何処から生まれてきましたか」「お母さんのお胎よう」「そのくらいのことなら、小学校の子供でも知っていますよ」「その前は」「見たこともないのにわかるものかい」 それなら、死んだ先は何処へ行きますか」「火を消したようなもので、わかるものかい」「道の真ん中で泣いている子供に、『お前は何処から来たのかい』『知らん』『何処へ行くのかい』『知らん』来たところも行く先も知らないのが迷い児でしょう」「お婆さんは知っているのかい」「そのくらいのことを知らないようなことで、念仏行者といえますかい」「それなら言ってみよ」「言ってみよというくらいで言われるものかい」「どう言ったらよいのか」「教えて下さいと言いなさい」「教えて下さい」「言いますよ。前があったから今がある、今があるから後が出てくる」「そのくらいのことなら誰でも知っているわい。」「知っているのなら、始めから答えたらよいではないか」と話しました」と言っていました。

コロンブスがアメリカ大陸を発見しましたので、イサベラ皇帝が大歓迎会をした。口々に讃辞を浴びせている中に、心よからぬ友人が、「無いものを発見したのなら讃める価値があるけれども、有るものに行き当たったのだから、讃める値打ちはないではないか」と嫌味を言ったとき、コロンブスは机の上の鶏卵を持って、「君この鶏卵を机の上に立てることができるか」と尋ねた。「両方の丸いものが、どうして立つものか、絶対に立たない」「どんなにしても立たないか」「どうしても立たない」コロンブスは一方を破って立てた。「そうすれば立つよう」「馬鹿、どんなにしても絶対に立たないと言ったではないか、そうすれば立つようとは何事ぞ。俺は何日も不安な航海をつづけ、水夫たちは俺を殺して帰ろうと相談していたが、帰るまでの

食料がない、死を期して辿り着いた大陸だ。有るものに行き当たったとは何事だ」と言ったとき、拍手喝采、友達はコソコソ逃げ出したそうですが、お婆さんの言葉で「そんなことなら誰でも知ってるわい」というのと同じことです。知っているのなら、なぜ言わないのだ。簡単ですがよく説明していますよ。前が有ったから今がある、今があるから後がでてくる。過去があるから現在がある、現在があるから未来がでてくる。原因があるから結果がでてくる、結果の中に原因をつくっている。梅の花が咲いた咲いたと思っているうちに実を結び、実の中に次の原因を用意しているのです。